

攻め…篠崎
受け…安西 諒

一・

退院後、篠崎は必要最低限を除いて安西から離れようとはしなかった。それは安西の体調を心配してのことでもあったが、退院して三日、まだあまり身動きを取れない安西の気持ち思いやっつてのことだった。

「諒、暑くないか」

「ええ、大丈夫です」

「痛みは」

「鎮痛剤を飲んだばかりですよ」

「映画でも観ようか。気が紛れるだろう」

いつの間にか、オンデマンドの契約をしていたらしい。リモコンを操作しながら安西の好きそうな映画を探している。

「篠崎、僕に遠慮しないで外の空気を吸ってきていいんですよ」

「遠慮？ 違うよ、遠慮なんてしていない。君と一緒にいたいんだ」

ストレートに愛情を表現されることに未だ慣れていない安西はこういう時にくすぐったい気持ちになる。篠崎は海外生活が長かったので、その影響だろうか。

「…ああ、君が外の空気を吸いたいのか」

安西の言葉は心のどこかにあっただからこそ出たのだろう、と思われたらしい。確かにそれは間違っていないから、素直に頷いておく。

「そうだな…ベランダに出ようか」

言うが早いか、篠崎はベッドから降りると寝室の窓を開け、看病用にとベッドサイドに置かれていたスツールをそのままベランダに出してしまう。室内物を気にせず屋外でも共有してしまうのは靴を履いたままの文化で育ったからなのか…いや、部屋に入れるときに脚を拭くのもかもしれない。…いや、拭かない。多分。

「鎮痛剤が効いてからの方がいいか」

質問とも独り言とも取れるそれに首を横に振ることで答える。痛みはきつい、その痛みよりも何倍も幸せな気持ちで安西を包んでいたから。

「しのぎさき」

甘えたいとき、篠崎を呼ぶ声は舌足らずのようになってしまう。とろんとした声は意識しているわけでもないのに。でもその声を、篠崎は好んでいることをもう経験から知っている。少しだけ目元が柔らかくなるのだ。

「おいひ」

腕を伸ばし、篠崎の首に回す。そのまま横抱きにされてベランダから出た。

ふわ、と柔らかい風が二人を包む。

閉めっぱなしは身体に良くないから、と篠崎はよく窓を開けて換気をしてくれるが、外で風にあたるのとはやはり違う。

「座るよ」

篠崎は安西を抱いたままそっとスツールに腰掛ける。安西を座らせないのはまだ安西が一人で座るのに怯えているとわかっているからだ。

玉を取ったわけではないので、座る分には痛むことはないだろう。しかし、普段は意識していなくても自分の力で座る——特に背もたれがない椅子——には無意識のうちに腹筋を使っているものだ。安西はまだ腹に力を入れるのが怖い。篠崎はそれをわかっているから、ベッドでも食事やテレビを観るときはリクライニングを起こしてくれるし、風呂では安西の目に患部が入らないように横にしてくれたり、抱えてくれたりする。

「痛くないか」

「大丈夫です」

座ってしまうと目線が下がってしまう。ベランダの手すりが邪魔で外の景色はあまり見えなくなつたが、篠崎の腕の中にいるというのが心地よい。

「気持ちいい…」

「そうか」

篠崎は黙つたままずっと安西の身体を支えていた。安西の体重は篠崎の足に乗っているとはいえ、背中を支えているだけでも大変だろう。しかし安西よりも筋肉質な男はつらい表情一つ見せず安西が満足するまでそうしていた。

二。

「食事だ」

ベッドで生活している安西に代わり、今や全ての家事は篠崎が行っていた。

「ありがとうございます」

ベッドのリクライニングを起こしてもらい、足を挟むようにしてベッドトレイをセットイングしてもらおう。その上に次々と置かれるレモン水とカトラリー、そして一人用の鍋。鍋の蓋を開けるとそこには。

「お粥？」

それはとても美味しそうだが、安西に食事制限はない。もしかして篠崎の体調が良くないのだろうか。篠崎を見るが、篠崎は何も言わなかった。

いただきますと挨拶をしてから安西がスプーンを手取る。篠崎もベッド横のスツールで片手に同じものを食べ始めた。

(食欲はありそうだけど)

篠崎の様子が変わつたところはない。食事が終わつたら体調を訊いてみようと思つて、お

粥を口に運ぶ。具材も米もとろとろに溶けるように柔らかく煮込まれていた。味付けも薄めでもとても美味しいが、嚙まずとも飲み込めそうなそれはやはり病人食のような気になる。食事はあつという間に終えた。お粥なのに後を引く美味さだったのだ。きつと丁寧に灰汁取りされ、素材の味が溶け出していたのだろう。

「あの、篠崎…」

「ん？」

食器の片付けを終えて戻ってきた篠崎に問う。

「体調とか…悪いですか」

「いや、元気だよ」

声にハリもあるし、顔色も悪くない。咳や鼻水のような風邪の様子もない。本当に元気そうだった。でもそれなら何故お粥なのだろう。

「それより諒。明日の夕方、ベランダで食事をしようか」

「え」

思いがけない言葉に瞠目する。

「小さなテーブルと、寝ころべる椅子をネットで注文した。明日の昼には着くから、暗くなる前の夕方になるが外で食べよう」

きつと、安西が外で気持ちよさそうにしているのを見て考えてくれたのだ。嬉しさが心から溢れだし、笑顔になる。

「ありがとうございます」

安西の喜ぶことをとを考えてくれたのがとにかく嬉しくてたまらなくて、安西はスツールに座る篠崎に手を伸ばした。応えてくれた手を掴み引き寄せ、強引に口づける。

「好き、好きです篠崎…」

「愛しているよ、諒」

今度は篠崎からのキスをもらった。それでもまだ触れるだけなのは安西の体調を気遣ったことだろう。早く元気になって、沢山キスをしてほしい。沢山身体に触れたいし、触れてほしい。

「あ、」

「うん？」

キスの後抱き込まれて幸せに浸っていたが、お粥の謎が解けていなかった。

「なんで、お粥だったんですか」

「…：退院してから、尿しか出てないだろう」

「ッ！！」

まさか気付いていたなんて。いや、確かに排泄は全てオムツで篠崎に替えてもらっていたから気付かれて当たり前なのだ——。確かに思い返してみれば、昨日の食事も水分が多めだった。さりげなく、手を貸してくれていたのだ。きつと問い詰めるまで何も言わなかったのは安西の羞恥やプライドを汲んでくれていたからだろう。

「腹も少し膨らんでる。苦しいだろう」

優しく腹を撫でられる。労わるような手つき。そこにあるのは呆れも蔑みもなく、優しいだけ。

いいえ、と嘘を吐くのは簡単だが、真摯に安西のことを考えてくれている篠崎に嘘を吐くのは嫌だった。

「…ちよつと……」

おしっこは羞恥より先に、漏れ出てしまったのだ。術後は恥ずかしがる間もなく、簡単に言ってしまうえば安西の意思による排泄ではなくお漏らしの状態が続いていた。しかし、大便是そういうわけにはいかない。篠崎に処理させるのも嫌だし、そもそも横になったままでは難しい。それに、いきむのが怖くて堪らなかった。

入院中は経験豊富な看護師が「皆さん同じですから大丈夫ですよ」と優しい微笑で言い、篠崎が席を外している間を選んでさくっと浣腸で済ませてくれていたのだ。

「しの…」

何も言わない篠崎に不安になる。隠していたことを怒っているのだろうか。

「諒、浣腸しようか」

「やっ、それは……」

看護師さんは仕事だし、慣れているからよかった。けれど篠崎は大便のオムツ替えなんて経験もないだろう。しかも赤ん坊のならまだしも、大人のものだ。

「……わかった。今日一日様子を見よう」

「ん……」

ありがとうございます、と言って布団を頭まで引き上げる。

猶予は今日一日と言うけれど、今日も明日も一緒だ。篠崎に見られてしまうのなら、何も変わらない。

「諒、大丈夫」

布団の上から慰めるようにポンポンと胸元を叩かれる。世話ばかりかけているのに、どうしてこう優しいのだろう。

~~~~~

「あ…」

「ん？」

朝食を終えてベランダで日光浴をしていたとき、下腹部がじんわりと温かくなったことに気が付いた。

「出ちゃった…」

「替えよう」

そう言ったまま、篠崎は安西を置いて寝室に入ってしまった。まさか、と思ったがその通りだった。

「あ、あの、篠崎……」

渡されたテディベア。受け取ってしまったえばその大きさ故にもう下腹部は見えない。

「倒すぞ」

背中を支えられながら椅子のリクライニングを倒され、寝ころぶ。

「や、外……」

「大丈夫、見えない」

「やだ、」

「諒」

まさか、外で。ベランダとは言え、外だ。近所を走る車の走行音も、外で遊んでいるらしい子供の楽しそうな声も聞こえている。そんなところでオムツを替えるなんて。

「すぐに終わるよ」

大声を出して方が一上や隣のベランダから覗き込まれたら。かと言って暴れば患部の傷口が怖い。安西はじっとしている以外なかった。大人しくテディを抱いて、足を投げ出していればペリというテープの音が聞こえる。もしお隣が在宅していたら。ベランダで外を眺めていたら。このテープの音が聞こえてしまうんじゃないかと、そう思った。思ったら、感じてしまった。だって、外でオムツを替えてもらうなんて経験、したくてもできないことだ。下半身に風があたるなんて。そんな中で陰部をお尻拭きで丁寧に拭ってもらうなんて。

安西は声が漏れてしまわない様に必死にテディに顔を埋めた。

（おちんちん……なくてよかった）

あつたら、確実に勃起していた。それだけでなくいやらしい液体まで漏らしていたかもしれない。

「終わったよ」

「ありがとうございます……」

恥ずかしくてそのままの姿勢で言う。失礼なのに、篠崎に気分を害した様子はない。

「大人しくできて偉かったな」

頭を撫でられたと思ったら、足音と共に篠崎の気配が消える。きっとゴミを捨てに行っただのだ。

（篠崎は世話をしてくれているだけなのに、感じちゃうなんて……）

自分はなんていやらしいのだろう。ベランダでのオムツ替えに興奮してしまうなんて。

「諒？まだかくれんぼしているのかな」

「ッ……」

また子供扱いだ。

「テデイの時間は終わりだよ」

取り上げられて、テデイはベッドに戻されてしまう。

「買わなきゃよかったかな」

少し拗ねたようなそれに、笑った。

くくく

ベッドの中、ぎゅっと抱きしめられ、もう二十分以上頭を撫でられて、安西はとろとろになっただけ。篠崎に注意をされてからその後、おしっこを全部きちんと申告できたご褒美の時間。

「諒くん、おしっこが言えるようになって偉いな。そろそろうちも自分でできるかな」

「うち……」

「そう。お尻にお湯を入れたらどう？」

「……うん……気持ちよかった……」

「……そうか。じゃあ、もう一度しようか」

安西は篠崎の腕の中でこくりと頷く。

頭の中がふわふわして、思考が定まらない。眠いような、眠くないような。篠崎の腕の中は不思議だ。甘える、甘えたい、子供になりたい、そんな気持ちふわふわと脳内を満たすのだ。そしてそれを篠崎は受け入れてくれる。甘えるのを喜んでくれる。

「お湯を持つてくるから、待つてなさい」

「やだ、しのぎさき、」

「ほら、テデイがいるよ」

テデイを渡されて、抱きしめる間に篠崎は寝室から出て行ってしまふ。寂しいけれど、大声で呼んだりはいらない。だっていい子で待つていたら、もっと沢山褒めてもらえるから。

「いいこで待つてたな」

言いながら寝室に入ってきて、コトリと軽い音がする。お湯の入ったシリンジがサイドテーブルに置かれたのだ。

「お尻を出そうな」

オムツを外されて、お尻を剥き出しにされる。横向きにされて、背中を丸める。

ぬるりとした指にアナルを溶かしてもらって、ゆっくりと温かいものが腹を満たしていく。

「んっ……」

「気持ちいいか？」

「きもちいいっ」

もしおちんちんがあつたら、きっと我慢できなくて扱っていた。でも今はないから、まだ患部にも触れてはいけないから、ぎゅっと目を瞑って我慢をする。

仰向けになって、オムツをあててもらって、それからまた横向きにしてもらい、排泄感を逃がすように深く息を吐く。

「テデイどいてくれ」

テデイがどかされて、また前にみたいに正面から抱きしめてもらう。

「しのざき、うんちでる……」

~~~~~

十.

「あん……」

「諒？」

「オムツがクリトリスに擦れて……」

「気持ちがいい？」

「はい……射精の練習をしてもいいですか」

「うん、見ているから、してごらん」

オムツを外してもらって、ベッドに座ったまま膝を立てる。もう腹筋に力を入れても痛みはないので自分で座ってオナニーができる。もう何度練習しただろう。毎回イけるわけじゃない。むしろきちんとイけた回数の方が少ない。けれど、早く上手に射精ができるようになりたかった。

篠崎に取ってもらったローションを右手の人差し指にだけつけて、小さなクリトリスにあてる。小さな、可愛いクリトリス。でも海綿体がないから勃起はできない。柔らかいままの未熟なクリトリス。

クルクルクルクル——

「あっ、あっ」

クリトリスだけど、感覚はおちんちんの先っぽだ。亀頭攻めのようなそれに目を閉じて喘ぐ。開いて曝け出した陰部に感じる篠崎の熱い視線。見られている。見られながら、はしたくオナニーをしている。勃起すらできないクリトリスを弄って、気持ち良くなるようにしている。

「あんっ！」

「諒、おしっここの穴の周りが勃起しているよ」

「あっ……」

クリトリスを弄っていた指をゆっくりとスライドしてそのすぐ下にある尿道口に触れる。そこは周りも含めて少しだけぷくぷくとしていた。

「気持ちいいっ！！いいよおっ！！」

くくくく

十六・

「足を広げなさい」

髪を乾かしてもらったあと、ベッドの上で足を開く。膝裏を持って陰部を差し出すポーズは手術前と変わらない。カテーテルは入れられていないので、そこはまさに無防備なままだ。篠崎の気持ち一つでぐちゃぐちゃにされてしまう。

「今からしっかりとお仕置きをするよ」

「あっ……」

「反省するまでやめない」

「……はい……。お仕置き、してください」

「なぜお仕置きされるのかな」

「洗ってるだけなのに気持ち良くなって、篠崎にクリトリス押し付けた悪い子だからです……」

「それだけではないな？」

「……今は射精管理中で、イっちゃいけないのにイこうとしたからです……」

篠崎はきちんとお仕置きの理由を明確にする。なぜお仕置きをされるのか。理不尽なお仕置きではなく、安西が悪い子だからお仕置きをされるのだときちんと安西に理解させるためだ。

「そうだ。諒くんはいやらしい子だから、いい子になれるまでお仕置きをするよ」

くくくく

陰囊を掴まれる。少し乱暴な手つき。こりこりと中身を確認するように握られ、痛みに呻く。潰されてしまうのではないかという本能的な恐怖に背筋が冷える。ああ、痛めつけられてしまう。唯一残った男である証を、もしかしたらダメにされてしまうかもしれない。握られるだけでそう思ったのに――

「あ……あ……ああああああ……！！！！！！！！！！」

近所迷惑なんて考える余裕もなく口から洩れた悲鳴。玉に、鋭い痛みが走る。袋にクリップがつけられたのだ。

「あああああああ!!!!」

一つじゃない。二つ、三つ……強すぎる痛みで陰囊の感覚がなくなっていく。でも作業は続いているようだから、もっと増えているのだろう。痛い、痛い、痛い。経験のない激痛。握り潰されるよりも鋭い痛みが続いていく。増えていく。それでもなんとか、膝を抱える手は離さない。足を支える手に痛いほどに力を入れて耐える。

「……これを啜えていなさい」

「ふぐっ！んんっ！！」

タオルを噛ませられた途端、クリップがつけられた陰囊を掬うように持ち上げられ、落とされる。それを何度も繰り返され、あまりの痛みで涙が零れた。

くくくく

このあと、痒み責め、口オナホ（マウスピースで強制開口）があります。

5万字弱、ほぼエロというか排泄管理とお仕置きのための構成です……。